スタンフォード大学東アジア図書館蔵「集古画本〔読本挿絵集〕」の書誌学的研究

髙木元
大妻女子大学文学部日本文学科

抄録

米国スタンフォード大学に所蔵されている「集古画本」（名所図会・読本類の挿絵だけを切り出して合綴したもの）二七種三八二冊などの〔読本挿絵集〕に関する、一次資料に基づく書誌調査と、その全丁のデジタル撮影とを、二〇一八年九月二～八日に渡米しスタンフォード大学にて実施した。

キーワード：江戸読本・絵入本・享受史

江戸時代における最も格調の高い小説は『南総里見八犬伝』に代表される読本（よみほん）であった。しかし大変に高価であったゆえ、主として貸本屋を通じて流通していた。明治期になり活版本が普及しだすと貸本屋の廃業が続いたが、その蔵書の行方は不明であった。しかし、フランス国立ギメ美術館図書室蔵未整理資料の調査を通じて、読本の末路の一端が明らかになった。すなわち、十九世紀初頭にジャポニズムに沸くヨーロッパへ、読本の口絵や挿絵だけを抜粋合冊して輸出されていたのである。

以下、便宜上「西日本新聞」に寄稿した研究成果の紹介「パリに渡った和本たち」の一部分を引用しておく。

日本の近世出板文化を彩った和本たちは、江戸人の日常生活の中に潤いをもたらしていたが、日用品であるがゆえに、多くは消耗品として使い捨てられたものと思われる。ところが、十九世紀末に来日した西欧人たちの中には、この美しい錦絵や絵入りの和本に魅せられた者が少なからずいて、帰国後にオークションなどで多くの和書を購入してコレクションを形成した。現在、それらが美術館や大学図書館などに寄贈され、長年未調査のままで眠っていたのである。コレクターの中には日本語に堪能に者もいたが、多くは錦絵や和本に入れられた口絵や挿絵を愛で慈くしんだものと思われる。

西欧において彼等が知っていた書物とは、皮革が用いられた重厚な装丁により、ずっしりとした量感を備え、洋紙に油性インクで黒々と印刷され、時に銅版版画と見紛う木口木版に拠る小さな細密画が入れられたものであった。日本に来てみたら、多くの本

屋が町中にあり、大勢の人々が当たり前のように本を読んで暮らしている。そのリテラシーの高さに驚いたのみならず、和本は柔らかな和紙を素材として造本され、端正な装丁を施されて軽量であり、透明感のある植物染料とあいまって、本文を摺った墨色も好ましく見えたに違いない。つまり、和本は彼等の知っていた書物とは、全く別物としての様相を呈していたのである。

和本の多くには浮世絵師が描いた挿絵が入れられていた。構図や描写の繊細さはいうまでもなく、見る目も珍しき極東の島国の風俗を描いた画像は、たとえ本文が読めなくとも、それだけで充分な魅力を備えたものであった。在外コレクションの多くが浮世絵や多色刷りの絵本を中心としている理由は容易に理解できる。つまり、和本とは世界に誇れるきわめてビジュアルなメディアなのであり、浮世絵や絵本のみならず、和本の魅力の一端は、その画像にあったと断言しても差し支えない。

さて、パリにも大きな和書のコレクションが存在している。ギメ東洋美術館に所蔵される二百冊ほどの〔読本挿絵集〕を見ることができた。明治二十年代になって活字翻刻本が大量に流通し始めると、貸本屋の需要が減り、多くの店が閉店していくことになる。その際に古書市場に出た大量の貸本屋本の挿絵だけを集めて綴じ直したものである。これらは、欧州で絵入和本の需要があることを知った業者が、輸出用に仕立て直したものと想像され、謂わば廃物利用とも見做せるものである。特に日本には残存していない稀覯資料は見当たらなかったが、逆に貸本屋における江戸読本の典型的な蔵書構成が遺されていると考えられる。つまり、資料的に稀少価値という意味はないが、十九世紀末に於ける西欧と日本との文化交流史を示す痕跡として、絵入読本の挿絵だけが本文とは独立して絵画資料としての意味を持っていたことに思い至るのである。

在外和書のコレクションに見出せるのは、資料としての稀少性だけではなく、和本の持つ文化史的な意義である。と同時に、嘗て消えゆく和本の魅力を見出した西欧人たちの審美眼は、昨今の「日本文化は日本人にしか理解できない」などという偏頗な国粋主義を相対化しているともいえよう。

（二〇一四年八月十三日（水）「西日本新聞」朝刊 十一面 文化欄）

しかるに、最近、ギメ美術館と同様の〔読本挿絵集〕がスタンフォード大学東アジア図書館に所蔵されていることを知った。粕谷宏紀「スタンフォード大学フーバー研究所 EAST ASIAN COLLECTION 蔵「江戸時代版本」目録」上（「語文」七十六輯、一九九〇）に記されたコレクションの解題に「「集古画本」と称する（名所図会・読本類の挿絵だけを切り貼りしたもの）二十七種三八二冊」があると記されているが、「集古画本」は、この目録からは除外され登載されていない。ただ、スタンフォード大学東アジア図書館のサイトに粕谷氏の作成された「集古画本」に関するワークシートが公開されていて、今回の調査に大いに役に立った。

しかしながら、氏の作成したワークシートは板本の板心やノドの記述をメモしたもので、精確な書名の記載がなく、かつ「不明」とされている標目も少なくない。尤も、氏は読本等の専門家でもなく、現在のようにインターネット上で様々の画像資料が公開されていない時代であったから、止む得ないことではあった。

そこで、二〇一八年九月二～八日渡米し、スタンフォード大学東ア

ジア図書館蔵〔読本挿絵集〕全頁のデジタルカメラに拠る撮影を実施した。ギメ東洋美術館蔵と同様の「画工の友」という書き題簽を持つ資料（No. 252）が十四冊（第九冊欠）、深緑色無地表紙に題簽中央。同様の「好古文庫」（No. 58）が十冊、新調した文様地表紙に題簽左肩。それに加えて大部の「集古画本」がNo. 1からNo. 27まである。多少の欠本はあるものの各十五冊宛、新調した表紙に題簽は中央か左肩に付す。

可能な限り原本で確認した上で、書名（内題）と巻数丁数、挿絵の標題を示した細目を作成している。データの一端を示しておこう。

No. 5-2「集古画本　二」

一　忠婦美談」薄衣草紙巻之五「井出の里にて童謡を聞く」　七ウ又七オ

二　忠婦美談」薄衣草紙巻之五「玉の井のきどくを見る」　九ウ十オ

三　忠婦美談」薄衣草紙巻之五「名美稚玉水の邊にて姫に逢ふ」　十三ウ又十三オ

四　忠婦美談」薄衣草紙巻之五「梅里の舘再興」　又十三ウ十四オ

五　善知安方忠義伝巻之一「如月尼弟平太郎を養ふ平太郎幼より大膽強氣にして姉のいさめをもちひず後に良門と名告ハ是なり」　十四ウ十五オ

六　善知安方忠義伝巻之一「千歳の蝦墓の精異人に化して平太郎に謀叛をすゝめ妖術を以て相馬内裏の形勢を見する」　廿ウ廿一オ

七　善知安方忠義伝巻之一「其二」　廿三ウ廿四オ

八　善知安方忠義伝巻之一「蝦墓の術をもつて鬼神土蜘を役す」　廿六ウ廿七オ

九　善知安方忠義伝巻之一「如月尼妖術によりて悪意に変じ謀叛をくはだつ兄弟をいさめてうとう安方自殺す」　三十ウ三十一オ

No. 7-12「集古画本　十一」

一　朝夷巡嶋記全傳第六編巻之三「愛歓交聚岩神宿家信初到鎌倉人」　六ウ七オ

二　朝夷巡嶋記全傳第六編巻之三「義秀鎌倉に義父義兄弟に謁見す」　十七ウ十八オ

三　朝夷巡嶋記全傳第六編巻之三「小壷の海に義秀雌雄の鰐を手捕にす」　廿五ウ廿六オ

四　朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五「義秀知己主従と再會の二」　七ウ八オ

五　朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五「頼家月夜に嫦娥とものいふ」　十八ウ十九オ

六　朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五「天城山に義秀鉄盾矢藤護を生拘る」　廿六ウ廿七オ

七　三七全傳南柯夢巻之三「今市布施夜三勝を豪奪す」　二十四ウ二十五オ

八　三七全傳南柯夢巻之三「右　半七が忠義途に三勝を奪ふ　左勇を奮て平三今市等と戦ふ」　廿七ウ廿八オ

九　千代曩媛七變化物語巻之二「玉谷眞平倶梨迦羅峠にて山賊を鏖す」　三ウ四オ

十　千代曩媛七變化物語巻之二「出邑震平小女臈かせ母を殺す」　八ウ九オ

このように、数タイトルの口絵挿絵のみを十丁ほど合綴して一冊にしてあるが、一標目の巻数もバラバラであるし、あるテキストの挿絵を集成しようという意識や、ある特定の絵師の作品を集成しようという明確な編纂意識は見て取れない。また、名所図会ものが多数あるのと絵入百人一首、草双紙合巻なども含まれている点がギメのものと相違している。ただ、一シリーズを十五冊として同様の装訂を施すなどの統一意識は見られるため、輸出販売を意図して作成されたものと推測できる。

つまり、安価な活版本が大量に流通し始めた国内での商品価値を失った貸本屋の板本は、その絵だけを抜き出して合綴し、大量に海外へと輸出されたのである。当初はヨーロッパのジャポニズムの影響と考えていたが、北米へも渡っていることが分かり、必ずしもジャポニズムの流行だけが理由ではないものと思われる。

いずれにしても、日本の出板文化のグローバル化が既に十九世紀末に見出せるのである。これら文化遺産としての在外和本の書誌調査とその分析を通じて、海外における絵入和本の享受相を明らかに出来ると思われる。

従来、在外資料の調査は、日本に遺されていない稀少資料にばかりに目が向きがちであった。しかし、一〇〇年以上も海外に大切に保存されていながらも、その所蔵機関の司書には整理が困難であった資料群を調査し、その書誌情報を公開することは急務である。それに拠って、日本文学が画像と共に享受された伝統が存すること、そしてそのビジュアルな魅力を備えていたからこそ、浮世絵と同様に文字も読めず日本語も分からない諸外国の人々の関心を惹いたことが理解可能になるからである。換言すれば、日本文学の視覚的側面からの汎世界的影響について、具体的に論じるための根本資料を提供し得るのである。

なお、最終的なデータは整備出来次第、しかるべき媒体で公開する予定である。

【謝辞】スタンフォード大学東アジア図書館と、担当研究員の Regan Murphy Kao 博士には閲覧に際して大変にお世話に成りました。記して感謝致します。

【付記】本研究は大妻女子大学二〇一八年度戦略的個人研究費（S3021）の助成を受けたものです。

（受付日：二〇一九年六月二十六日、受理日：二〇一九年七月四日）

高木　元（たかぎ　げん）

現職：大妻女子大学文学部日本文学科教授。
専門は日本十九世紀小説。
主な著書：『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―』ぺりかん社、一九五五年

A bibliographic study of “*SyūkoEhon*"; Collection of Stanford University (East Asia Library)

TAKAGI Gen[1]

[1]Faculty of Language and Literature,　Otsuma Women’s University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8357, Japan

Key words：Edo-Yomihon, Picture book, Enjoyment